

## 「井戸」―斉学習⑧

上を見上げると、ポツカリと、おてんとうさまのように円い、明るい空が見えて、そこから、三つ四つ、小さい顔がのぞいていた。

T 丑は、これまで何回も上を見上げながらおりてきの？それとも今初めて？

Cs 初めて

T わけも言えるね。

幸則 「上を見上げると」だから、今までずっと見てたんなら、こんなふうに書かん。

真人 幸則君と同じで、「上を見上げると」て、いきなりみたいやで。

力 あのな、この慣れる前はこわかったでな、横とかいっぱい見てたけどな、だんだん慣れてきたでな、ほやさかい、上を見たと思う。

T わかる？今まではこわくて上も見余裕がなかったということでしょ。ただしがみついているだけ。それが、だんだん余裕が出てきて、あたりを見回したり上を見る余裕が出てきたということでしょ。

Cs うなづく

T さあそうなったとき、丑が見たもの、もういっぺん読んでみましょう。

「上を見上げると……のぞいていた。」

これを見た時に、丑の心はどうなったか。みんな、この場面頭に浮かべて。

(この文を板書する)

じや、これを見た時に、丑のだんだん大胆になってきた気持ちは、これを見て、しぼんできたでしようか、それとも大胆になった気持ちはもつとふくらんだでしようか。

Cs ふくらんだ

和幸 いや、両方とも言える。

T ここで、もつとふくらんだと思う人

C (ほぼ全員)

T 反対。また、緊張してきたという人。

勇也 拳手

T じや、それぞれどこからそう思うのか1分間時間をあげますから、まとめて下さい。待つ間、もう一度ゆっくり朗読してやる。

T じや、ひとかけらでも、考え出してください。晃典

晃典 うんとな、「やつらくやしけら、きて見ろ。いばったってここまでこれれめが！やあい。」て、いばってて、みんなにはこれれんところまできたんやで、だんだん自分がみんなよりえらいでな、……

T 晃典の言うてることは、この言葉を読むと、丑がずいぶん強そうになってる。ということは、大胆な気持ちがどんどん広がっていると考えられる。

美豊子は

美豊子 次のページに丑は大声でどなったって書いてるで、丑は気持ちがふくらんでいって大声で言ってる。

和幸 ほやし、「ハツとして」やで、なんか考えごとしてたんやろ。なんかみんなの文句とか言ってる。

T 今二人が言ってることは、丑の気持ちがどんどんふくらんでいってるんだ。だから、「やつら」て心の中でどなったり、大声でどなったりしてるんだ。

それはそれとしてね、じや、丑は、この景色(ポツカリ)を見た中で何か感じなかったらどうか、て考えてください。

Cs この見えた景色の中で丑の心が何かパツと変わるものはなかったらどうか。

Cs なんかわからんけど、感じがある。

貞幸 「ポツカリとおてんとまのように円い、明るい空が見えた」

うんとな、さつき丑は井戸の中に入った時くらかったやろ。ほんでな、とちゅうからな、上のぞいてみたら、明るい。

T たいへんだいじなこといつてるみたい。だれかもらえない？

勇也 急に暗かったのに、上見たらおてんとうさまのように円い明るい空が見えたでな、なんかはげましてくれてるみたい。

T ほう。これを見たら励まされるみたい。

裕幸 丑は中へ入るときは、なんかいやでいやでしようがなかったんやろ。ほやけど、そのおてんとうさまのような円い明るい空が見えてな、ほれで丑のこころを明るくした。

真人 入るときは、真っ暗で、何も景色がかわらんかってな、こわいのにな、上見たら、みんなが元気づけてくれるみたいに見えて。ほんで元気がでる。

T みんなが元気づけてる？

真人 明るい空が。

T 空がだね。

和幸 ぽっかりと、やさかいに……なんか……さっきまでは見んかったんやろ。まわりだけ見て。それが急に見たんやさかい、……わからん

裕幸 暗闇の世界にあかりがついた。

T 明子、おまえどう思う

明子 最初はこわかったけどな、自分が明るい空をみて、なんか、大胆やったのが、またもうちょっと大胆になった。

T そこ、もうちょっと考えられない？この明るい空で、もっと大胆になったというのはなんでだろう。

和幸 空が見えたで

T そう。明るい空が見えたら、丑の心がなんか大胆になるって、どういうことだろう。

C 暗闇の世界から

出口

善崇 やっぱり励まされる、っていうか、よけい恋しくなる。この暗闇の中にずっとじこめられるかもしれへんし、さびしくなる。

T うん……

保、さつき手あげてたね。

保 ぼく「三つ四つ小さい顔」のとき

T ああ、こつちか。これも聞きたいね。

どういうことなん。

保 今までなんか、みんなが大きい見えてた、いうか自分より大きい存在にみえてたやん。それが今は、小さい顔で見えてるさかいに、自分のほうが大きく見えてきた。

T ああ、すごいこといつてるね。だれか、わかる。

保がいたいことわかる、という人

幸則 なんか、今までは他のもんがじぶんよりえらい人というか、そういうふうに思ってたんやろ。ほれが、今ではちつちようみえるさかいにな、自分のほうがえらく見えてきた。

T ぼつんぼつんと顔もさだかには見えないちつちやな顔。いままでは、とてもかなわない、自分はだめだみんなはすごいやつだとみえていたのが、今は、みんながちつちやく見えてきた。

裕幸 自分より下に見えてきた。

力 そう考えるんやったら、丑は気持ちがでつこうなってるんや。

T うん。保は、このことも丑の気持ちがあくらんで

いく理由の一つになるって言ってる。

勇也 ぼく、反対。「そこから三つ四つ……」て書いたるやん。ほんで、井戸に入る前は、みんなでつかかったのに、急にちつこうなったやん。ほんで、どこ行ったか、心配してるの。

T みんなから離れてしまった、ということ？

みんなは、どうですか。勇也は、みんなからあんなに離れてしまった、で、こわくなってきた。という。

保は、反対にみんながちつちやく見えてきたから、

丑は大胆になってきたという。

力 ぼくたもつちに賛成。

哲郎 ぼくは、たもつちちゃんのほう。今までみんなから、文句ばかり言われてやん。ほやけど、なんかちつちようなつて、自分ができることがみんなはできんで大きい気持ちになっている。

和幸 ぼくもたもつちのほうやけどよ。なんで、いじめてたみんなの顔見てさびしいなるの。

T つまり、丑はみんなを頼りにしてたの？

Cs してへん。

T ないでしょ。丑のことなんか何も心配していな世界から離れていくんだから。

むしろ楽になってるほうに近いでしょね。

ほど、今二つ出たのね。これ（明るい空）とこれ（小さい顔）。

もうひとつね、さっき明るい空ではげまされるとか

いってたけど、ここに発見があると思うの。

今まで丑も含めてみんなが見ていた井戸の世界は、どんなのだった。

Cs 暗いの。いやーな。

うすぐらい地の底に消え込んでいた

T そういう不気味な世界でしょ。でも今中から丑が見ているのは、おんなじですか。

裕幸 先生、上から見たら、下は暗いやろ、そやけど、下から上を見たら、明るい。なんか逆になってる。

この井戸の感じが。

T いいことにきづきかけてる。上から見た世界は、うすぐらい得たいの知れない世界。でも、中から

見たら…:

幸則 井戸のとは入口で、みんなは、そんなとこにいてるけど、もう自分はこんなとこまで来た。いう気が。

T うん…:

上からみたら、消え込んでいる。でも下からみたら、出口がある。

Cs ほんでこわないのや。

和幸 ああん。みんなから見たらこわいけど、丑から見たら出口が見えてるでこわないのや。

T 分かる？そういう発見もあったらろうと思います

その次よむぞ。

丑は、なんだかじぶんが下へおりるのではなく、高いところへあがって行くのだというよ  
うな気がしてきた。

T なぜそんな気がしてきたのだろう。

和幸 ぼくは、「ぼっかりと…:」と「高いところへ…:」が同じようなこというてると思う。ほんでまたこ  
で気が大きくなって。

弘子 なんか、ようわからんけど、丑と井戸はおんなじになってきてる。

T お？丑と井戸がおんなじ？

弘子 うん。もうこのときの丑はな、弱虫じゃなくてな、井戸もなんかな…:

T なんかもおもしろいこといいかけてるね。どういふことなんかな。

Cs 丑と井戸が仲間なんや。

T 弘子、もうちよつと言って。

弘子 この時の丑はふだんの弱虫の丑じゃなくてな、なんか、自分が下におりていくのはな、自分が上  
上がっていくようなきがしたのはな、だんだん自分が弱虫からはなれていってるような気がしたん。

T ほう。

和幸 わかったわかった。その出口で丑が弱虫じゃなくなっただん。

力 いや、うそついてるで弱虫や。

T ちよつと待って。弘子がいってることをもっとみんなでわかるうや。弘子は、今丑が弱虫から離れて  
いってる、ていう。

保 自分がよわかったらな、下におりていくのが、ずっと離れていくゆうな気がするけど、自分がなんか気  
がつようになったさかいな、下に行つてはなれていくんとちごてな、なんか、みんなより上のほうへい  
みたい。

力 保ちゃんがいうたので思うんやけどな、丑が深い井戸のところへ入つていってもな、下へ行くほど気がつ  
うなってるでな、みんなよりもな、みんながこわいとおもつてるところへいってるでな、自分はだんだんつ  
なつてきてるでな、

和幸 3つ4つの顔が丑をおいかけてきてるみたい。

真ひと 丑はな、井戸に入ってきててな、弱い丑をそこおいていてな、ほんでどんどん中へはいつていくほど、弱い丑から離れていつてつようなったような、そういう感じになってると思う。

T ああ。弘子がいったのもそういうことかな。弱い丑を捨てていく。

大輔 丑とな、三つ四つのぞいている顔とな、その間が、強い弱いの間になっていつてるの。

T うん……

なんかここを言葉にするのはむつかしいけど、丑がみんなを見ている目が変わり、自分がぐんぐん大きくなっていくことを上へ上がっているようなことをこういう言葉でいいあらわしている。

和幸 幼虫がかぶと虫になるみたい。

T じゃ次読むぞ。

「やつら、くやしけら、きて見ろ！いばったって

ここまでこれれめが！やあい！」

丑は、そう心の中でどなっていた。

力 なんか、「心の中でどなっていた」というところを読むと、なんか丑は気がちいそうになっていつてるみたい。

T どうなんだろう。ここは。

裕幸 まだ完全に気がつようになってへん。

力 まだみんながこのへんとするところぐらい互角のせりあい

T そういうふうを読むかな。

和幸 なんかわからんけど、そうではないと思う。

裕幸 「心の中でどなっていた」というのがなんかひっかかる。

T ひっかかるね。これは、まだこわくて口に出せなかったということなんですか。

裕幸 いや、もうこわいことはぜんぶなくなってる。

T じゃ、なんだ。

智士 あんな、まだ自分がつようないでな、心の中でしかどなれへん。

和幸 そうじゃない。

T もうすこし先を読むと

「ピシヤリと、つるべが水にふれた。底についたのだ。丑はハツとして」てかいてるね。「ハツ」というのは  
我に返ること……

ハツとするまでは？

裕幸 なんか、もう自分の考える世界にはいつてる。現実の世界から夢の世界へいつてる。

T さあ、そこで考えられへん？

C s ……

どうもせめきれないので次時、改めて考えることにする。

